

特別セッション「歴史にみる貨幣の多様性：近代との接点から」

座長・組織者 鎮目雅人（早稲田大学）

パネル趣旨

中央銀行を中核とする専門銀行のネットワークが特定の領域における通貨の発行を一体的に行うという現代の貨幣制度は、19世紀までに欧州において成立し、これが世界的に普及、浸透したものであるが、近年、決済分野への他分野からの参入、デジタル通貨の導入等、さまざまな次元で現代の貨幣制度への挑戦が起こっている。本セッションでは、時計の針を巻き戻すかたちで、現代の貨幣制度が普及、浸透していく過程で何が生じていたかを、固有の起源と伝統を有する非欧米社会の視点から探ってみたい。もとより、各時代、各地域の状況は区々であり、現代への直接的な含意を導くことには慎重であるべきである。そのことを認識したうえで、非欧米社会が欧米発祥の諸制度と出会ったときに、貨幣の使用に関して何が起きたのかをみていきたい。具体的には、パプア・ニューギニア、西アフリカ、日本を例に採り、それぞれの社会が元来持っていた貨幣制度はどのようなものであったのか、欧米勢力の進出に対してそれぞれの社会がどのように反応したのか、その中で在来の貨幣制度の何が変容し、何が温存されたのか、また二つの異質な貨幣制度がどのように関係したのかを見ていきたい。

パネリスト・論題（報告順）

1. 深田淳太郎氏（三重大学）「パプアニューギニア・トーライ人の貝殻貨幣」
2. 小林和夫氏（早稲田大学）「植民地化以前の西アフリカにおける布貨幣」
3. 小林延人氏（東京都立大学）「幕末維新期の日本における紙幣」